

## スタンダール『恋愛論』と日本

粕谷 祐己

日本におけるスタンダール紹介の歴史については既に大岡昇平や栗須公正氏の詳しい研究<sup>1)</sup>があり、これに筆者が何かつけ加えるというようなだいそれたことはできない。しかしちょうど「スタンダール」の名が日本語に登場して一世紀が経つ今、この作家のこの国での最初の姿を再確認しておくのもよいことだろうし、特に『恋愛論』に注目して初期のスタンダール受容を見直しておくことにはいささか意義もあるように思われる。

### 1. 作家の人物像

フランスの作家「スタンダール」をはじめて日本に紹介したのはおそらく上田敏である。それは雑誌『太陽』の臨時増刊「十九世紀」(1900年=明治33年6月15日発行)中の「十九世紀の仏蘭西文学」においてであった。この最初の紹介で興味深いのは、文学史上におけるスタンダールの位置(「純乎たるロマンティック派なれども [...] 後世の写実主義の祖たり」184頁)等を述べたあと(作品名としては『ラ、シャルトルゥズ、ドゥパルム』と、別の頁でロマン主義についての記述の中で『ラシヌ及び沙翁』があげてあるのみである)例の有名な没後の名声の予言の話が出てくることである:「又曰く、恐くはわれ千八百八十年の交に成功すべしと。果然此予言は命中せり」(184頁)。限られた紙数の中で型どおりの客観的記述の続くなかで作家自身の声、それも自論の開陳ではなく人格の表出ともいえる言葉を直接法で引用したものは「十九世紀の仏蘭西文学」中他にはないと言ってよく、たいへん目を引くものである。「スタンダール」は、まだその作品が一行も日本語になっていないうちから少々自負心過剰な、しかし面白そうな人物像として読者の前にたちあらわれたと言えよう。

上田敏の最初の言及から7年後の1907年(明治40年)10月、スタンダールについてかなり詳しい解説が発表される。『新思潮』創刊号所収のS.T. 生訳「スタンダール研究(リュッツオウ伯の説)」<sup>2)</sup>がそれである。そこでも「謎語にも似たる、Stendhalの性質を極めやうとするなら、要として、彼れが一生涯の曲折を知らねば

1) 大岡昇平「明治のスタンダール 敏と鷗外」(初出1948年)、「大正のスタンダール」(初出1982年)、「日本のスタンダール」(初出1986年、いずれも1989年刊講談社文芸文庫『わがスタンダール』所収)、栗須公正「明治文学におけるスタンダール像」(『アカデミア 文学語学編』、1981年2月号)、「大正文学におけるスタンダール像」(同1982年9月号)。本論は以上の論文と桑原武夫・鈴木昭一郎編『スタンダール研究』(白水社、1986年)に多く拠っている。なお以下の引用では原文の旧字体を適宜新字体に改めたことを注記しておく。

2) 原典はCount Lützow, « Stendhal – A study » in *The North American Review*, vol. CLXXX, 1905, p.829-841.

ならぬ」(24頁)とされて読者の興味が人間そのものに向けられている。続いてこの文の本体である伝記紹介に入るが、今日から見れば不正確な点も多い。とくにスタンダールが実戦を経験した勇ましそうな軍人として紹介されていることには注目したい。たとえば、作品の内容紹介としてはほとんど『赤と黒』『カストロの尼』だけしかないと言っていいこの文において『日記』のウィーン進駐の下り(1809年4月12-18日、*Œuvres intimes I*, Pléiade, 1981, p.517 以下に相当)から以下のような引用が数カ所もあるのは興味深い。

徘徊良久しく、Lombach (sic) 僧院の形勝を賞して、自ら曰ふ、「此の如きの好景、未だ曾て眼にしたる事なし」と。次いで、砲数門僧院に向へるを見、顧みて、Lacombe に言ふ、「好景、欠くる処は唯だ砲火と、敵の襲撃のみ」と。(29頁。原文は1809年5月5日、*Œuvres intimes I*, p.533 に相当)

この下りの最後は「之れを見ても解らう、Stendhalの作中に現はるゝ、戦場の描写等は、皆彼自身経験したももの中から獲来つたのだ」(30頁)と結ばれているのである。日記の記述まで出してきて戦争描写に注目している割に『バルムの僧院』のあの有名なワートルローの下りに全く触れていないのだが、それは戦場でうちよるすばかりのファブリスの描写が百戦錬磨の軍人と想定されたスタンダールのイメージにそぐわないからということかもしれない。

さてこのリュッツォウ Lützow 伯の論文翻訳の三年後に上田敏がスタンダールを大きくとりあげ、日本人の心にその姿をくっきり定着させる。小説『うづまき』(初出『国民新聞』1910年=明治43年1月1日~3月2日)である。この小説においてスタンダールは心理的閉塞状態の突破口を示す役割を負っていると言えるほど重要な存在であり、彼の所説と彼の人間像とが混然とした総体として機能しているのである<sup>3)</sup>。最初の紹介はプロシアの一地名をペンネームとして小説を書いた「拿破崙軍の龍騎兵中尉」としてである。登場人物の一人は：

うん確乎覚えてはゐないが、何でもこんな言だった。「此仏蘭西の偉人は、拿破崙の如き勢を以て、『彼』の欧羅巴を蹂躪し、欧州文明数世紀の測量家、発見家となつた。其疑惑し狂喜した謎の或物を解くには、其後優に人間の二代は掛つた。実に不思議な快樂論者だ、疑問の人物だ、仏蘭西最近の大心理学者だ」と感嘆の辞を奉つた上、「恐らく此人は現代の仏蘭西人中最も精妙な耳目を持つてゐる」と迄言つてゐる。(引用文は『定本上田敏全集第二巻』(1985年)より。580-581頁)

と「ニイチェ」を引用する。その後もスタンダールはリュッツォウの紹介におけると同様、冷静沈着な軍人として提示される。

3)『うづまき』におけるスタンダール紹介の出典については栗須公正「明治文学におけるスタンダール像」を参照されたい。

[...] サン・ベルナルの山路を、拿破崙に二日後れて通越して伊太利亜の沃野に転戦した時も、イエナ、ワグラムの大战に加はつて、「何だこれだけか」と嘯いた時も、莫斯科の焼落を壯観だと言って、マルテエル、プラトオンの書を読んだり、露西亜征伐の帰途惨憺たる退却軍の中に居ながら、毎朝綺麗に髭を剃る事を欠かさなかつた時も、常に人心の観察者といふ態度を執つてゐたのだ。(同581頁)

行動することを知っている人物スタンダールは「分析の智力と、実行の意志を兼ねた」(同594頁)人物として紹介されているのである。

## 2. 『恋愛論』の登場

さてこの『うづまき』において、スタンダールの思想の中核のように多くの頁数を割いて扱われているのが『恋愛論』中の所説であることは興味深い。

然しあの「恋愛論」を始めて読むと、一寸驚くね、女の慎深く羞洟むのには、九の特色がある、愛は個人の性質や国民性や周囲の状態で、種々の変化を受ける、一体愛に四種の別があると書いてあるぢやあ無いか。中世の煩瑣哲学みたいだよ。(同583頁)

から始まって四種の愛の話、恋愛の七段階の話、「ザルツブルヒ」の小枝の挿話つまり結晶作用説が順に相当詳しく紹介されている。『恋愛論』以外で重要なスタンダールの要素というと、日本の現状とジュリヤン・ソレルの登場可能性についての話くらいなものであり<sup>4)</sup>、『パルムの僧院』については、言及はするが解説するに至っていない。

結局スタンダールは次のように全体評価されている。

一口に言へば、此精力と美の宗教を奉じた先生は、智力と意志の力を兼有した所が豪いんだ。非常に、精妙な分析力を持つてゐながら同時に感情の人、実行の人となれたのが珍しい、[...] (同584頁)

スタンダールの評価は常にスタンダールという人物そのものに返されるのであり、そしてその人物の思想の中核は『恋愛論』に現れているのであった<sup>5)</sup>。ちなみに先のリュッツオウの紹介文でも『恋愛論』は、ナポレオンの没落に無関心であったという架空の人物サルヴィアッティの心境(第1部第31章)がスタンダール自身のものとして引用されているほかは

4) 上田敏はすでに「戦後の思想界」(『時代思潮』明治38年=1905年9月5日)で同じ指摘をしていた。

5) 栗須公正氏は上記論文で、上田敏は『恋愛論』『赤と黒』は実際に読んでいただろうと推定している(18頁)。

[...] 続いて“Rome, Naples et Florence” “L’Amour”及び“Histoire de la Peinture en Italie”を出した。此の三者の中、前二者は、今は筆を収めた日記の続き見たやうなものである。(31頁)

とある通り、作家の実人生との密着において評価されていた。

つまり『うづまき』刊行時点の日本におけるスタンダールは『赤と黒』の作家というより『恋愛論』の思想家であったという方が実態に合っているのである。そして作家としての作品そのものの評価以前に恋愛を重視する思想家としてその人物像に興味が集まっていたと言っても過言ではなからう。『恋愛論』の読みに恋愛の実践家としての作者自身の体験が裏打ちされていくことになるからである。

この『恋愛論』への注目の帰結のように、『うづまき』発表の翌年、後藤末雄によって『恋愛論』抄訳が『三田文学』二月号に掲載されている。わずかに十数頁のほんの抜粋とはいえ、スタンダールの書いたものが孫引きでなく直接に日本の読者の前に現れたわけで、今日あまり意識されることはないがとにかくこれが、佐々木孝丸による初の『赤と黒』翻訳に実に11年も先んじたスタンダール著作の本邦初訳というべきなのである。ちなみに後藤末雄はその前月『新思潮』に発表した『葉巻』なる小編で登場人物に早くもbeylismeという言葉 もちろんこれはこの作家特有の行動原理を意味するもので、やはり人物を志向している を使わせる(76頁)のと共に、“Sans les nuances, avoir une femme qu’on aime ne serait pas un bonheur, et même serait impossible.” 「多くの恋調なくして恋人を有することは幸福にあらず、また猶、不可能なり」という『恋愛論』の一節(断章107)を引用している(79頁)<sup>6)</sup>。

### 3. ドン＝ジュアンとスタンダール

スタンダールが『赤と黒』の作家である以前に『恋愛論』の著者であるというこの状態は相当長く続いたようである。昭和に入っても、谷崎潤一郎が英訳で『バルムの僧院』を読んで驚嘆し「此れ程の作家のものが、『赤と黒』と『恋愛論』を除いて、外に一向日本に紹介されてゐないのは不思議なことだ」(「饒舌録」、『改造』1927年＝昭和2年)と慨嘆しているが、この時点までに日本で出ているものを『スタンダール研究』邦語文献録に探せば、『恋愛論』は後藤末雄の最初の部分訳のあと井上勇、大戸徹誠、渡辺康夫の三訳を数えているのに対し、『赤と黒』は佐々木孝丸訳だけで、あとのスタンダール作品邦訳としては井上勇訳『ワニイナ・ワニイニ』(1926＝大正15年)があるばかりなのである。

もちろん、ほぼ全体を訳さないと意味をなさない長編小説とかなり増減の融通の利く理論的著作とでは翻訳出版の難易度に差があるのは当然であるが、この『恋愛論』重視の背景として当時の時代的風潮、西洋的恋愛観への興味もあつたこ

6) 栗須公正氏は同論文で「木村(莊太)と後藤(末雄)にとって、スタンダールは、恋に思念を凝らし、恋愛と人生と文学が渾然一体をなす近代作家として映っていたようだ」と述べている(20頁)。

とは疑いない。「大正は恋愛至上主義の時代だった」<sup>7)</sup>し、第一次大戦直後は「愛又は恋愛に関する大正期の重要な著作が相次ぐ」<sup>8)</sup>時期であった。大岡昇平によれば、大正10年に朝日新聞に連載された厨川白村「近代の恋愛観」は翌年単行本化されベストセラーとなっている<sup>9)</sup>。また『恋愛論』受容の背景として「女子教育また結婚が法的には両親の管理下にあった大正、昭和初期にはフェミニズムと連動」していた<sup>10)</sup>。タイトルをわざわざ『性愛』とした大戸徹誠訳(大正12年=1923年)は明らかにこの文脈から生まれた出版であった。

ともあれ『恋愛論』がスタンダールの主著的扱いを受け、作者個人の恋愛体験がその内容と直結しているであろうという見解は読書界を支配する。とくに顕著なのは、恋愛の型としてのウエルテル型とドンジュアン型の二大別という『恋愛論』59章の主題とスタンダールの名の結合である。

たとえば島崎藤村が大正12年(1923年)発表の「愛」(『新小説』6月)でドン=ファン型、ウエルテル型の話でスタンダールを引き合いに出している<sup>11)</sup>、芥川龍之介も「僕の好きな女」(『婦人倶楽部』大正9年=1920年10月1日)で「スタンダールの『愛』と云ふ本に惚れ方を大別して、ウエルテル式とドン・ジュアン式と二つ挙げてありますね。[...]」(引用文は1977年刊『芥川龍之介全集第4巻』による(292頁))という話をしている。

これ以前にも阿部次郎の「聖フランシスとステンダール(ママ)」(初出『三田文学』大正3年=1914年7、8月。『三太郎の日記・第二』所収)にドン=ジュアンが現れるが、そこではスタンダール自身がドン=ジュアン主義の権化として扱われている。

俺は(三太郎は)今此人(スタンダール。筆者注)を俺の眼の前に据ゑる。さうして自分自身の生涯を考へる。俺の中にも少からぬドン・ホアンが見出された。(7月号、3頁)

女性が「文字通りに俺の全生涯を充した」「俺は唯俺の愛した女達のためにのみ苦勞し通した」(2頁)というスタンダールの人物イメージから生まれた連想であることは明らかである<sup>12)</sup>。

7) 大岡昇平「大正のスタンダール」、講談社文庫版、251頁。

8) 栗須公正「大正文学におけるスタンダール像」13頁。

9) 大岡昇平「日本のスタンダール」、講談社文庫版、336頁。

10) 同351頁。

11) 藤村が朝日新聞掲載のパリ通信にも、リュクサンブール公園のスタンダール記念碑にある著作題目から冒頭の『ド・ラムウル』だけに言及したり(大正4年5月12日号。「春を待ちつつ」所収) サン=ミシエルの本屋の店頭で「スタンダールの『愛』」を見つけたたり(大正4年8月3日号。「街上」所収)しているのは興味深い。

12) 明らかに『三太郎の日記』におけるスタンダール像はスタンダール自身にも、またスタンダール自身によるドン=ジュアンの定義にも合致しないものになっている。このことは阿部次郎自身が認めていて、『合本三太郎の日記の後に』(大正7年=1918年5月)で「スタンダール自身がドン・ファンの味方ではなくてヴェルテルの味方をもって自任していたことをも記憶しておかなければならない(De l'Amour LIX)。しかしこの事実は彼が余の意味におけるドン・ファンであることの実証にはならないと思う」(引用は『合本 三太郎の日記』、角川書店、1968年、454頁より)と弁解している。

なおフローベールとスタンダールを芸術家の態度の両極とする見方を説いた柳沢健の論文「芸術家二つの型」(『新潮』大正12年=1923年3月)も興味を引く。「フローベールは『人間は皆無』と言つたが、スタンダールにとつては『人間』が総てであつた」(10頁)というわけなのだが、プレストの慨嘆と呼応するこのスタンダール観は、スタンダールの諸作の背後に作者の実生活を見ようとする態度、またそれを見ないと作品自体が理解できぬとする態度に結びついていることは論を待たない。

#### 4. 『恋愛論』の凋落

1930年代に入ると大岡昇平と桑原武夫がこの作家について、「語り尽くすことができない」と書いたヴァレリーを地で行くように大量に書き始める。小説技法等についてももちろん論じはするが、結局作家の生を含みこんだ、むしろそれを中核に据えるというのが彼ら二大スタンダリアンを初めとする多くの研究者の基本的態度であったことは言うまでもなからう。

しかし『恋愛論』、とくにその中の思想そのものへの関心は相対的に減じることになったと言えよう。もちろんそれはスタンダールのその他の著作が次々に翻訳、紹介されていったからであるが、他にも理由があったように思える。つまり『恋愛論』の論旨自体の無秩序さであり、そのことがようやく日本でも意識されだしたということだ。『性愛』の訳者大戸徹誠は「スタンダールの文章は元来難解を以て有名なものであつて、これを巧みに訳しこなすには訳者の力は余りに不足してゐた」(6頁)云々と自らの非才を詫びているが、昭和2年(1927年)の『恋愛論』全訳刊行の前年に訳者井上勇が雑誌『虚無思想』5月号に掲載した「スタンダールの『恋愛論』」で「文章がまづくとも、論旨が四離滅裂でも、雑文の寄集めであらうとも、此の書は常に新らしく生きるであらう」(50頁)という評価をしている。『恋愛論』が難解なのは訳者の(そして読者の)読解力に問題があるというより、元々が秩序を欠いた書き方をされているからであるということが広く了解されるさきがけとなる指摘と言えよう<sup>13)</sup>。

原文の無秩序さだけではない。読解の助けとなる研究、注も不十分であった。『恋愛論』中に登場する膨大な数の人名、著作名について多くは解説もなく放り出されていて読者は途方にくれる。実は『恋愛論』に関してこの種の不備はフランス本国での研究状況が原因であり、十九世紀、二十世紀はおろか二十一世紀の現在に至ってなおあまり改善されているとはいいがたいのである<sup>14)</sup>。このようなフ

13) ちなみに大岡昇平は1949年に『恋愛論ノート』(小山書店)なる大胆な抄訳版を刊行している。翻訳と言うにはあまりに原文を恣意的に省略・結合しているのだが、『恋愛論』原著からなんとか秩序だった思想を救い出して読者に提示しようと試みた点で一考に値する本である。

14) 一例をあげると、断章140冒頭の“J'appelle plaisir toute perception que l'âme aime mieux éprouver que de ne pas éprouver”「私は人間の魂が感じないよりは感じることを好む知覚を快感と呼ぶ」(大岡訳)云々にはスタンダール自身が出典をMauvertuisと明記しているにもかかわらず、モーベルチュイの何という著作からの引用であるか既存のどの批評版にも注記がない。ちなみにこれは*Essai de philosophie morale* (1749) 第一章冒頭の句であるが、これを批評版の中に組み込もうとする人がいなかったのは『恋愛論』が軽視されているからだろうか、

ランス本国における扱いを考えれば当然のことではあったが、かつての日本における注目度にもかかわらず *Stendhal Club* 日本研究者特集号（1977年1月）でも、またその後日本で出版された浩瀚な『スタンダール研究』（1986年、白水社）でも『恋愛論』を主題に取り上げたものはなかった。

しかし『恋愛論』を重要視すること自体は必ずしも誤った発想ではなかったように思われる。人物も作品も先入見を去って最初から見直すならばかならずこの作家の仕事全体が新しい意味を持ってたちあらわれてくるし、そこにおいてとくに『恋愛論』は突破口となってくれるはずと筆者は信じている。現に地味にはあるが日本において『恋愛論』に特別な関心を持つ研究家は途切れることがなく、筆者もまたその末席を汚しているのである。われわれはスタンダールが計理官であったにすぎず、ドン＝ファンと呼ばれるにはほど遠い愛し手であったことを知っている<sup>15)</sup>。『恋愛論』が語学的レベルですでに難解さを持っていてフランスの研究者さえ敬遠気味であることを知っている。生とエクリチュールの間に新しい関係を結ぶのはこれからなのである<sup>16)</sup>。

それゆえ筆者個人としては『恋愛論』もスタンダールも徐々に真価を知られるようになっていくものと信じて心安んじていることをつけ加えてこの小論の結びとしたい。

（D. 1987、金沢大学助教授）

---

あるいはこんないいかげんな書き方をされた本に真面目に注をつけるなど優雅さに欠けるからということだろうか。

- 15) しかしいったん広まってしまったスタンダール・イメージは、その後の研究が一般の目に触れにくくなってしまったこともあって根強く残っていると云わねばならない。『ニーチェ事典』（弘文堂、1995年）のスタンダールの項の記述はその一例である。
- 16) 1996年12月にソルボンヌで『恋愛論』だけを扱った学会が開かれ、研究発表が *Persuasions d'amour : Nouvelles lectures de De l'Amour de Stendhal* (Textes recueillis et présentés par Daniel Sangsue, Droz, 1999) として活字になったのはその兆しと言えよう。序文でサンシュー氏はこの本を「『恋愛論』だけを扱った初めての本」le premier livre traitant exclusivement de *De l'Amour* (p.9)としている。